



篠津地域 農業開発のあゆみ



やまもと まさひと
山本 正人
北海道開発局札幌開発建設部
札幌北農業事務所長

一、はじめに

石狩川下流部の泥炭地は明治の開拓期以来、入植希望者の多いところであった。そこは平坦で農業開発の期待をもたせるものであった。自然の泥炭地に入るためには先ず排水である。排水は地域全体で系統的に実施することによって初めて効果を発現するものである。

初期の入植者達は排水の比較的容易可能なところへと入植していった。多くの苦労で排水溝を掘り、わずかに乾いたところを耕し自活用の畑としていった。

泥炭地の農地化は排水・客土・酸性矯正といわれる。大面積の泥炭地では個人では不可能で、公的・共的事業が絶対的に必要なのである。

篠津地域*を農地にしようとする泥炭地との闘いは、水との闘いでもあった。泥炭地の農地化には、排水、客土が必須であり、排水溝、暗渠排水、道路等の基幹施設の整備が図られた。当初は馬そり、軌道などによ

る客土を繰り返し返すにつれその効果は大きく、やがてポンプ送泥、ダンブ客土、索道などによる客土がなされていった。その後の多くの改良の成果として収穫量の飛躍的な拡大と食味の改善に多大に結びついていく。

今や、先人たちが流した汗が礎となり、幾多の人々が開発の心をもつにして成し遂げてきた土地改良事業の「あゆみ」が石狩地域の一大穀倉地帯として発展し、効果で「ゆめびりか・ななつぼし」も作付けできる優良農地に生まれ変わった。

「ポンプではきだす泥に希望あり
国策で白いご飯にありつける
先輩の労苦の力篠津あり」

二、開拓の礎

篠津地域の開拓は明治維新により岩出山藩主伊達邦直が家臣736戸の生活の方途を求めて、北海道への移住・開拓を志し、明治5年に当別町に入地したのが始まりである。

明治14年には篠津太（江別市）に屯田兵村が計画され、青森、岩手、

山形から19戸、さらに40戸が入植しているが、後に全戸が新篠津へ移住していることが、この地の開拓・入植の困難さを物語っている。

三、囚人排水を掘る

明治18年に太政官書記官金子健太郎が北海道を巡視した際に、「湿地の拓地殖民を行うには、排水を掘りその泥土を道路開築に用い、排水路は運河に利用する。作業は樺戸集治監（明治14年開庁 初代典獄月形潔）の囚徒を用いて開築費の節減を図る」と建築している。

明治29年より樺戸集治監の囚人により篠津運河が掘り進められたが、泥炭地の特性としての水路底土の浮き上がり、法面の崩落が続き、舟運はおろか通水もままならず、起点より5・5km掘り進んだところで中止となった。

その後も篠津原野の改良と篠津運河の浚渫改修は実施されたが、国策としての外地への発展・開発がすめられ、さらには第2次大戦へとな

り、この地域の本格的開発は戦後を待つことになる。

四、篠津地域泥炭地 開発事業の開始

戦後、新たな入植者を迎えることになった篠津泥炭地は、既存の運河や排水溝が泥炭地特有の法崩れなどの崩壊でその機能を失い、湿原のまま放置されていた。

終戦後の日本の緊急課題は、食糧の確保と戦災者・復員者・帰国者らの収容であった。特に、居住・食糧増産のため北海道の大規模な土地はそれらの期待を集めるものであった。その中でも気象・水利条件などから篠津地区は注目された。しかし、泥炭地として農地の開発には多く課題を抱えていた。政府は多いなる期待と希望をもってこの広大な泥炭地の開発に挑戦することとなった。

昭和26年には、土地利用を畑地として、国営かんがい排水事業「総合篠津地区」に着手し、同時に「直轄明渠排水篠津地区」が着工し、

昭和31年まで実施された。

昭和28年には、農林省が建設機械の購入に要する外貨の借入金申請を国際復興開発銀行（世界銀行）に提出したところ、「篠津地域」が石狩川水域泥炭地開発計画のうち最も開発効果の高い地区とされ、建設機械購入費の融資が得られた。

また昭和31年には、不足する国内の食糧事情、社会経済上の有利性及び地元農家の水田作への意欲の高まり、泥炭地における開発技術の向上により、「総合篠津地区」は、泥炭地での開田を目的とした計画に見直されて、「篠津地域泥炭地開発事業」として着手し、総事業費210億円、15年の歳月をかけ、見事な水田を篠津原野に展開して、昭和45年に完了した。

五、篠津の事業における 新技術の開発

篠津地域泥炭地開発事業の実施には最大限機械力の活用を図る計画が建てられた。

中核となる篠津運河の掘削の浚渫ポンプ船の掘削刀の改良、さらには下層粘土の客土のための泥水化、ポンプ・パイプによる広範囲の圃場への輸送、さらには掘削泥炭の残土処理・敷き均しなどと新しい施工技術を独自に開発しながらの施工が進め

られた。

その中でも湿地用ブルドーザーの開発は、従来のブルドーザーでは接地圧、泥炭の繊維の切断などからそれ自体が沈下して作業不能状態となったが、履板を三角形にするという画期的改良により、接地圧の軽減、付着土の解消などからその作業性の根本的解決となった。

これは篠津地区の運河掘削工事のエキスカベータの捨土処理、排泥地造成、ポンプ船移動時の牽引、資材運搬等、主体作業及び主機械の補助作業等枚挙にいとまないほどの性能を果たし、その後、各地・諸外国でも活用されたという。

六、篠津地域の新たな展開

昭和45年の「篠津地域泥炭地開発事業」の完了以降、管理組織の充実を図り、水田用水・施設の管理を滞りなく行ってきたが、泥炭地であるための施設の沈下とそれに伴う機能低下、経年による施設の老朽化等により、維持管理費の増加が生じてきた。一方、農業経営の近代化と営農の合理化の実現に向けて、不足するかんがい用水の安定供給等、基盤整備の事業化に向けての期待と要望の高まる中で、昭和60年度に「国営篠津中央土地改良事業」着工を果たした。この事業により、錯綜す

る用水系統を再編整備し、100ヶ所余りの補助揚水機が廃止され維持管理費が削減された。一方、近代化用水確保に伴う揚水機規模の拡大に対応して、水路のパイプライン化を進めるとともに支線用水路には地域用水増進機能も持たせ、平成18年度に事業完了を迎えた。

国営篠津中央地区の着工後、老朽化した石狩川頭首工（昭和38年完成）の施設の充実を図るため、その下流300mに新石狩川頭首工を建設する「国営篠津中央二期土地改良事業」が平成8年度に事業着手した。現在、平成29年度完了を目指して、旧頭首工の撤去工事を進めているところである。

このような基盤整備や営農技術へ



新・旧頭首工を上流側から望む

の取組は、先人たちが幾多の困難を超えて築き上げた篠津地域において、消費者ニーズである良食味米の安定生産、農業者のニーズである効率的な営農展開、地域の創生・活性化を図るための6次産業化の推進といった時代の要請を下支えするものである。

七、あとがき

今、石狩川頭首工で取水されたかんがい用水は篠津運河を満々と流れ、5ヶ所の揚水機場から約7500haの水田へ配水され、青々とした美田が広がっている。「泥炭地を美田に」の願望のもとに始まった篠津地域泥炭地開発の事業は困難の連続であった。しかし、水と闘い、泥炭地と闘ってきた長い歴史が、篠津地域を一大穀倉地帯へ変貌させた。

改めて長期にわたる国、北海道、市町村、そして地域の農業者が力を合わせ、多くの支援を受け、今日の多くの大きな成果を得た「篠津地域泥炭地開発事業」は世紀の大事業であったと実感している。

*篠津地域とは石狩川下流右岸地帯の江別市、当別町、新篠津村、月形町4市町村に跨がる地域

【参考文献】

篠津地域泥炭地開発事業誌

(2016年5月受稿)